

入宋僧と接待所について

——入宋僧心地覚心と紀伊歎喜寺——

有馬嗣朗

かつて宮崎円遵^①氏は、熊野参詣ルートに位置する紀伊歎喜寺に接待所が設けられた背景に、入宋僧心地覚心（一二〇七〜一二九八）から何らかの示唆をうけたとし、入宋僧が接待所の理念を日本に招来し、施行したのであることを指摘している。かつて私も、栄西が大陸天台山で接待所を設けたことについて論じたことがあるが、その入宋は技術移入を目的としたとするものであったという試論であった^②。さらに、その入宋のスタイルを勧進の問題に系譜化していくと、心地覚心もその系譜上に位置すると考えられる。すなわち、覚心は臨済法灯派の祖である一方、虚無僧（普化宗）や、萱堂聖^③といった遊行聖集団の祖としての一面を有している。

こうした背景をふまえて、小論では覚心と歎喜寺の関係を検討する中から、覚心をはじめとする入宋僧が招来した接待所の機能とその意義について言及してみたい。

接待所（寺）について

接待所は五台山の巡礼ルートに設けられた簡易宿泊施設、普通（禪）院と呼ばれるものがその原型で、主に中唐から晩唐にかけて、五台山巡礼の流行にともなって普及した^④。日本からも多くの僧侶が五台山へ詣^⑤てたが、その利用は彼らの旅中日記から知られるところである^⑥。

こうした宿泊施設は宋代に入ると、巡礼ルートのみならず江南地方の開発・発展にともない、両浙地域を中心に接待庵（院・寺・局）や施水庵（坊）と呼ばれる施設として建設されるようになる^⑦。普通院が巡礼者、特に僧侶を対象に接待していたのに対し、接待庵では一般人にも開放していた。大衆化によつて接待庵は施入を集め運営における経済的基盤を確保するにいたる。その背景には交通の要衝における場の教化活動があつた。その一例に、思浄（喻弥陀）という浄土教僧侶が往来者の教化とその接待を行つた妙行院が挙げられる。思浄は三百万にも及ぶ往来者の接待を行い、一万人の浄土教信者と結縁を結んだ^⑧というが、その人数の多さは宋代におけ

る接待所の経済力の確保と大衆化を物語る一例であろう。

南宋期に入ると接待庵は、禅僧によって多く建立される。

怪山の僧大慧宗杲（一〇八九—一六三）は接待庵を建立したという事例は見られない。しかしながらその弟子久上人（生没年不詳）をはじめ、多くの門下が怪山に接待庵を設けたことは、心地覚心によって報告されているところである。覚心が二年間滞在した径山万寿寺には、「山麓の総門から六十里、山頂の寺塔にいたる間に接待あり、化城と名づく」（鷲峰開山法燈国師縁起）とあり、接待所が多数設けられていた様子が伺える。

心地覚心と紀伊歙喜寺

歙喜寺の前身は、京都御霊社の南に位置していた蓮光寺であつた。文永元年（一二六四）、後鳥羽院の菩提追善のために寄進された寺領（和佐庄）に護摩堂が設けられ、それを歙喜寺と称したのをはじまりとする。その後、歙喜寺は橘寺の末寺となるが、元徳二年（一三三〇）に菓徳寺の長老賢心（恵甄・生没年不詳）が菓徳寺内へ同寺を移し、以後歙喜寺は接待寺として機能していくことになる。歙喜寺に接待所を設けた背景については「右当寺者、依為熊野参詣路辺、彼寺長老賢心上人多年之間為往反禅律僧尼」と、歙喜寺が熊野を往還する禅律の僧尼を対象に接待を行ったとあり、一般人には開放

していなかつたようである。これが歙喜寺における接待の初見であるが、菓徳寺では円明寺の方丈空観（生没年不詳）に接待の志があることを理由として、橘寺から菓徳寺の別当職が文保二年（一三一八）に譲られている。既に菓徳寺ではその前後に接待が行われていたと伺われる。

空観と賢心は師弟関係にあつたとする説が伝えられているが、その実際は定かでない。しかしながら、両者は覚心を通じて繋がりが見られる。空観が住持していた円明寺の中興を覚心とする説があること、空観に次いで「由良の開山上人門流。先師大輪上人互為師資之儀」である賢心が菓徳寺の長老となるが、その大輪上人を菓徳寺の先代とする説があることを併せると空観も覚心の門流であつたのであろう。ならば、空観に接待の志があることを理由に、菓徳寺の長老職が橘寺より譲られた背景が理解できよう。

おわりに

大陸の接待所は聖地巡礼を契機として、以降開発や救済にもなつて各地に設けられた。特に教化という面での接待所の建立は、新興教団にとつて極めて有効な手段であつたようである。先に述べた浄土会結社の信者獲得の教や、宋代における径山禅の興隆などが、それを物語る。

覚心が接待寺を設けたという史実は確認できないが、覚心

の門弟たちがその門流を主張し、接待寺である歎喜寺の長老に代々就任したことは、覚心が門弟たちに接待所運営について指導育成を行っていたか、もしくは臨済法灯派の活動自体にそうした方針があったと考えてみてはどうだろうか。すなわち、覚心は帰国後、臨済宗法灯派をうち立て、さらには普化宗といった新興教団を構成する。そして、その教化活動の基盤として、大陸で見聞した接待所を設けたのであろう。

覚心が接待所設立に直接手を下したかどうか、また接待所受け入れの対象者についてなど課題は尽きないが、遊行聖としての覚心像の解明がこうした問題を紐解く鍵となっている。遊行聖が各地へ様々な情報を伝搬する役目を担っていたことは周知の通りである。歎喜寺は禅律僧を対象に開放していたが、接待所を訪れる禅律僧は総じて遊行する僧侶である。さらに覚心は遊行聖の祖という立場にあった。覚心とその門下が接待所を設ける背景には、覚心門流間における情報ネットワーク化という問題があったのかもしれない。

- 1 宮崎円遵「中世寺院の接待所について」(『龍谷大学論集』三七九・一九六五年一月) 参照。
- 2 拙稿「入宋僧の勸進活動について」(『印度学仏教学研究』四七一一・一九九八年二月) 参照。
- 3 五来重「高野聖」(角川選書・一九七五年) 参照。
- 4 那波利貞「簡易宿泊処としての唐代寺院の対俗開放」(『龍谷

史壇』三三・一九五〇年六月) 参照。

5 拙稿「入宋僧の系譜」(『文研会紀要』一〇・一九九九年三月) 参照。

6 小野勝年「入唐求巡礼行記の研究」二(法蔵館・一九六四年・四〇五頁) 参照。

7 石川重雄「宋元時代における接待・施水庵の展開」(宋代史研究会編『宋代の知識人』汲古書院・一九九三年) 参照。

8 島田修二郎「喻弥陀思浄とその阿弥陀像」(塚本博士頌寿記念仏教史学論集) 同記念会・一九六一年) 参照。

9 石川重雄「宋代の子院とその傾向」(『仏教史学研究』三一・二・一九八八年一月) 参照。

10 「長老大法惠鏡讓状案」(歎喜寺領和佐庄下村南村文書等紛失状) (『歎喜寺文書』・関西大学東西学術研究所資料集刊五・一九六八年)

11 「沙弥道珍田畠寄進状案」(『歎喜寺文書』前掲)

12 「沙弥惠性避状」(『歎喜寺文書』前掲)

13 「橘寺住持法空等讓状」(『歎喜寺文書』前掲)

〈キーワード〉 心地覚心、接待寺、入宋僧

(愛知学院大学大学院)